

日本歌唱芸術協会（本部：沖縄）



会 報

第四号

2022年3月

先師に学ぶ教育の原理と本質-その4

- マエストロはかく語りき ～ ラビージャ先生とスペイン歌曲のキーワード ～ ④
服部 洋一 pp. 1-4
- 音楽と私 I ～ オブラスツォア先生からの学び ～-----友利 あつ子 pp. 4-6
- 音楽との出会い I ～ 恩師との思い出 ～-----仲村渠 悠子 pp. 6-9
- 声楽家への軌跡-『師』との創造体験 ～『師』としての感受性 ～ 豊田 喜代美 pp. 9-12

【 歌・ことばの集い 】

- 声楽一步の精進 -----糸数 剛 pp. 13
- 乳幼児教育における音楽-----新垣 しげ子 pp. 14
- 「音楽はなぜ人を感動させるの？」についての一考察 -----瑞慶山 三雄 pp. 15



■ マエストロはかく語りき ～ ラビージャ先生
とスペイン歌曲のキーワード ～ ④

服部 洋一 声楽家, 博士 (音楽)

本編はシリーズ連載の第 4 回 (最終回) にあたる (第 1～3 回は同会報創刊号～第 3 号に掲載されている)。

2 年間のスペイン留学でラビージャ先生からみっちりと薫陶を受けたその記憶は、当時マエストロの下でレッスンを受けた曲の楽譜を開くたびに、師の神業のごときピアノの音とともに、そのひとコマひとコマが、今でも鮮明によみがえってくる。神業！まさにそう名付けるほかはない、的確で寸分の狂いもないタッチ、変幻自在のリズム、レンジの幅広いデューナミック、明確な対比を持ったアーティキュレーション…。どの場面もが、教えを受けた者の印象にこれほどまでに強く焼きつくレッスンというものがこの世に他にあるものだろうか？！そして、スペイン歌曲の珠玉の 1 曲 1 曲のここかしこで習ったことも、ラビージャ先生の弾かれるピアノの音とともに、この脳裏に焼き付いて離れない。そのフレージング、言葉裁き、ブレス、潔いアタックのタイミング、空間をよぎるフレーズのたゆたい感、フレーズの収め方とそのヴァリエーション、テンポ・ルバートのかけ具合とア・テンポへの厳格な引き締め方、スペイン独特の装飾音の扱い方—それらすべてが、ラビージャ流の明確な教授法がゆえに、レッスンを受けた者の心と身体にくっきりと深く刻まれ、一度教えていただいたそれらのことを、あれから 30 年以上経った今でも全く忘れることがない。教わった生徒が、その先何十年も、一つもぶれないでいられる原点を、わがスペイン音楽のマエストロは惜しげもなく、この日本人の筆者に与えてくれたのだった。師は、弟子が将来、その場の環境や気分に関わることなく、常に感動を呼ぶ均衡と質を保った演奏をし続けるためには、それぞれの曲にどのように立ち向かったらよいのかを次々と教えてくださったのである。そして恩師亡き今、それを後世に伝え、フェリ

クス・ラビージャの魂を、スペインの歌唱芸術の神髄を、永遠のもの、不朽不滅のものとして具現し、また伝えていくこと—それこそが弟子としての師への報恩感謝の道、師弟不二の道であると、筆者は信じて疑わない。

詳しくは後日、それぞれの作品別に論文として展開していくことを考えているが、このシリーズの最終回にあたって、ここでは、スペイン歌曲演奏へのアプローチとしてラビージャ氏より伝授された代表的なキーワードともいえるものを思いつくままに列挙してみたいと思う。

(各項目末に☆印のあるものは、ラビージャ氏自身の命名、あるいは口癖によるもの、それ以外は筆者が名づけたものとなっている。) スペイン語の発音をカタカナ表記することはあまり好まないが、カナ表記をする場合、原則として原語が 2 音節語である場合は強音節を音引きせず、三音節以上の単語においては強勢の置かれる音節を音引きで記すが、日本人が普通に読んでもアクセント位置がずれることはないであろうと思われる単語に関しては、あえて音引きを施さないことにしている。

さて、ラビージャ師から受けた薫陶を基にスペイン歌曲へのアプローチを行うときに見逃してはならないキーワードには次のようなものがある。



ラビージャ先生のレッスン室兼ライブラリーにて

ラビージャ先生と筆者 (1990 年夏)

【スペイン歌曲演奏上留意すべきキーワード】

- ① 異質要素の混淆と対比的要素の意図的対照化
- ② 変化志向性に富む表現
- ③ 抽象的な表現を忌避し、より直截な表現嗜好性を持つ
- ④ 微細な装飾音の開始音に力学的支点を設ける (apoya primera アポージャ・プリメーラ=apoyar en la primera nota アポジャール・エン・ラ・プリメーラ・ノタ「最初の音に支えをとること」の略称) ☆
- ⑤ ピアノ声部にギターの表現が見られる作品が多数存在する
- ⑥ 民族文化との強い関係性 (民謡 canción popular の元来の持ち味を伴った演奏が必要とされる) ☆
- ⑦ 後続フレーズのアタックのタイミングを逸しないために、先行フレーズ末を記譜よりも早めに切る (corta antes コルタ・アンテス = cortar la última nota anteriormente コルタル・ラ・ウルティマ・ノタ・アンテリオールメンテ) ☆
- ⑧ 二重の意味 (doble sentido ドブレ・センチード) ☆を持つテキストの表出を明確に行う
- ⑨ 音楽的表現のためにテンポを揺らし (遅らせ) たら、そのあとに必ず回復する (recuperar el tiempo レクペラル・エル・ティエンポ) ☆
- ⑩ 雄弁なピアノ声部の存在とその表現に内在する具体性に目を向けること
- ⑪ 8分の6拍子に内在する平衡感覚 (balancear バランセアール) とメタファー (暗喩) ☆
- ⑫ オルゴール効果 (cajita de música カヒータ・デ・ムシカ) ☆
- ⑬ ブレリーアス bulerías、アレグリーアス alegrías、ペテネーラス (グワヒーラス) peteneras (guajiras) 等々、或いはその変則系のスペインの伝統的リズムに基本的に内在するテンポ感についての理解を必要とする。

等々、実に枚挙に暇がないほどである。上記の項目については、もちろんスペインはヨーロッパの一部であり、伊独仏英など汎ヨーロッパ的

クラシック音楽作品一般にも見られるような要素も、当然含まれているのだが、実際に即して説明を加えていくと、スペイン歌曲には、なるほどこのことによってスペインの香りが益々倍加されていくのだなと感じてもらえるに違いない。

さて、2021年10月まで日本声楽発声学会の沖縄支部として活動してきた当団体も同年11月の解散決議をもって解散し、新たに独立した組織として日本歌唱芸術協会 (本部:沖縄) として再出発することになった。本シリーズ「マエストロはかく語りき〜ラビージャ先生とスペイン歌曲のキーワード」については本稿を以て一旦終了とするが、個々の作品に即してこれらの側面が具体的にどのような作品にどのように現れてくるのかについて、日本歌唱芸術協会の発行となる歌唱芸術研究に掲載していきたいと考えている。

【おわりに】

1988~90年のスペイン留学は、スペイン音楽面では上述のごとく、ラビージャ先生にお世話になり、また発声法の点では、同じくマドリッドにあるエスクエラ・スペリオール・デ・カントにて、アナ・イゲーラス先生、バルセロナではプライベート・レッスンで、マリーア・レモラ先生に大変お世話になった。いずれ他の機会を見つけて、これらマエストラたちに直に教わった発声メソッドについても記述を残しておきたいと考えている。

2年間のスペインでの歌修業は、充実のうちにも本当にあっという間に過ぎた。その間、歌と発声法の勉強の傍ら、ラビージャ師の生地、バスク地方へも、また褐色の大地アンダルシア地方へも旅し、スペインの様々な時代の歴史にも触れることができた。もちろん、ホアキン・トゥリーナの生地セビージャにも、ホアキン・ロドリゴの名曲で知られるアランフエスにも、そしてフェデリーコ・ガルシーア=ロルカと縁の深いフエンテ・デ・バケーロスにも訪れた。

中でもバルセローナは回数も滞在日数もダントツに多かった場所であるが、ここでは、地元の市民合唱団オルフェウ・アトランティダーのマエストロ、アントニ・コリュ氏と合唱団員の方々とも交流を深めることができた。また、同団によるサンタ・スサーナへの遠征公演にも随行した。特にこの合唱団をバックにソロ・ステージを務める、カタルーニャを代表する歌手の一人、メルセ・プンティ女史とは友好を深めることができ、その後もご家族とともに、バルセローナ近郊の避暑地にあるプンティ家の別荘のロッジにも泊めていただき、キノコ狩りを楽しみつつ夜の更けるのも忘れて音楽談義をした。プンティ女史には特に、エドゥアール・トルドラやフレデリク・モンポウの作品中、カタルーニャ語の詩による様々な歌曲のテキストのディクッションについて特訓もしていただいた。

留学の終わり近くには、ラビージャ先生から「ヨーイチは、カタルーニャ歌曲をよくぞここまで歌えるようになった。とつても君の声にフィットしているから、いいレパートリーになるぞ！」と太鼓判を押していただいた。このころには、博士論文のテーマをトルドラとモンポウの歌曲研究に絞ろうという方針まで出来上がった。その成果は後年、博士課程在籍中の論文提出へとつながり、博士課程修了後 1 年の審査を経て博士号授与（平成 6 年 3 月）に結実したのだった。

その時にはすでに国立琉球大学の助教授に就任して 1 年が経とうとしていた。男性歌手としては日本初の博士号獲得となり、拙著は国会図書館にも納められることとなり、この「トルドラとモンポウの歌曲研究—歌曲における〈カタルーニャ・ルネサンス〉の意味」はリポジトリ論文として公開もされている。

<https://ci.nii.ac.jp/naid/500000116379>

琉球大学に務め始めて 3 年目には、東京藝術大学音楽学部にも初のスペイン歌曲の実技講座が創設され、その講師として抜擢された。毎週藝大に沖縄から通うのは予算的にも到底不可能で

あったので、スペイン・中南米音楽研究家の濱田滋郎先生にも TT（ティーム・ティーチャー）として入っていただき、隔週交代で、筆者がスペイン歌曲やサルスエラの実技指導に当たり、濱田先生がスペインの歴史とスペイン音楽文化の紹介、作曲家と作品についての講義を担当してくださった。（現在は濱田滋郎先生の後任を、濱田吾愛先生にお願いしている。）

東京音楽大学大学院でも、平成 21 年度より大学院生のために初のスペイン歌曲の実技講座が誕生し、こちらでも開講当初から講師を務め続けてきた。また 2006 年、二期会にも「スペイン音楽研究会」が創設され、2010 年ごろからは同会の特別会員及び講師として歌曲、サルスエラの独唱・重唱の歌唱指導にも携わり、東京室内歌劇場においても「魅惑のスペイン歌曲シリーズ」の指導を担当し、現在に至っている。もちろん演奏家としてもスペインの古音楽から近現代歌曲のレパートリーを中心にリサイタルや演奏会を開催し続けている。

筆者のレパートリー、なかんずくスペイン・中南米歌曲の演奏と演奏解釈においては、まずはその大部分をフェリクス・ラビージャ先生から受けた薫陶に負っており、師に触発され、またその視点から作品を見ていく目が磨かれたことは間違いない。だがその一方で、この留学前においても、淵源をたどれば、青山学院英米文学科在籍当時からお世話になっていた故濱田滋郎先生をはじめとして、このシリーズでもご紹介した数々の先生方、諸先輩方がいてくださったからこそ、今の自分があると実感している。そして何よりも大切な存在は、自分の好き勝手な夢を、陰から力強く支えてくれた家内や家族の存在であった。もしその理解と協力がなかったとしたら、今日の筆者は全く形成されなかったであろう。それゆえ家族をはじめ多くの方々に本当に心から感謝している。また、改めて身の福運を噛みしめ直す機会を、この沖縄音楽発声研究会が、そしてそれを産み育てた日本音楽発声学会が与えてくださったことに深謝している。

この記述を読んでくださっている方々のなかには声楽で身を立てたいと、切なる思いを抱いている若い方々も大勢おられることであろう。自己の人生の大目的を実現するには、まずは、自己が何者になりたいのか、自分の愛する歌で、どのように広く社会に、何を還元し、成し遂げたいと決意しているのか、言い換えれば人生の「究極の目的」を打ち立てているのかが重要であるとお伝えしたい。その、いわば「一念」を抱き、保ち、何が起ころうとも諦めず、希望を投げ捨てず、ひるまず弛まず、日々精進を重ねて行ってほしいと願う。その深く強き一念が、想像を絶する求心力となって、自らの周りから、それは決して自己の近くからばかりでない、はるか海の向こう、遠い外国からも、自らの方へと強運を引き寄せることのできる力となっていくのだ。

自己の成長のために様々な指導者が必ず現れ、アドバイスを授け、優れた技を、高く深い思想を授けてくれるようになるのだ。金剛不壊の己が一念があればこそ、「人」に出会うことができ、そして「こと」に必ず出会うことができるのだ。メジャーな存在になりたいとか、有名人になりたいとか、もっとお金を儲けたいとか、そんな低級な私利私欲にまみれた動機では、真の人生の勝利を勝ち取ることは到底できない。

将来、歌で世のため人のために役立ちたいと考えている人たちにこそ、筆者は伝えたいと思う。若い方々には、特に、前方に立ちほだかる困難に敢然と挑み、生き抜き、逆境の時にこそ成長の因が築かれるということ。何ものにも屈しない生命力、自らの命（ミクロ・コスモス）に宇宙大（マクロ・コスモス）の大生命を呼び起こすにはどうしたらよいのかについても、またテーマを変えて別の機会にお伝えしていきたいと思っている。

（本会 理事）

■ 音楽と私 I

～オブラスツォア先生からの学び～

友利 あつ子 声楽家

会員の皆様、初めまして。この度「日本歌唱芸術協会」に入会致しました、友利あつ子と申します。

私を声楽へと導いて下さった師との出会い、演奏家として叱咤激励して下さった師に感謝しております。

幼少の頃よりピアノを習っておりましたが音楽大学へ進学するため、中学生の時、平良勝先生、公子先生ご夫妻の門を叩きました。当時、宮古島で本格的に声楽のご指導されている先生方がいらっしゃることはとても貴重なことで、先生ご夫妻に出会えたことは私の財産です。

平良先生ご夫妻は武蔵野音楽大学や昭和音楽大学などに多くの生徒を送りだされており、私が入門したときも音大受験を控えた先輩たちが歌のレッスン、ソルフェージュ（和声、新曲視唱、聴音）の勉強のため先生のお宅に毎日のように通っておりました。高校入学と同時に私の音大受験に向けて本格的にレッスンが始まりました。那覇から宮古島に平良先生が週一回通って来て下さるので、少しでも多く学びたい吸収したいと、私たちはお互いのレッスンを聴講し、伴奏をすることで色々な曲を学び、楽譜を深く読むことを教えて頂きました。

武蔵野音楽大学を受験するため高校二年生より大学の夏期講習会を受けることになりました。講習会ではソプラノの中西八寿子先生がレッスンしてくださいました。高校三年生の夏季講習は男の先生のレッスンも受けてみたらと平良先生の勧めで、バリトンの足田生次郎先生のレッスンを受けましたが、私の声は *leggero* なので、ソプラノの先生がいいのではないかという事で中西八寿子先生の門下に入りました。

1991年武蔵野音楽大学に無事合格し、入学いたしました。いよいよスタートした大学生活！全国から集まった声楽科の同級生150人。

はじめて習うイタリア語とドイツ語。新しいことを学ぶ楽しさや難しさ。

中西先生から「友利さん、せっかく東京の大学に進学させてもらったのだから、スポンジのように色んなことを沢山吸収したいわいよ。先輩たちも頼りなさい。あなたの力になってくれますよ。」と仰って下さいました。中西先生に頂いた言葉は本当に感謝しております。

基礎を身につけるために、VACCAJ, PANOFKA, SALVATORE・MARCHESI, コンコーネ 25 番, コンコーネ 15 番などを練習に取り入れ、レッスンではイタリア歌曲、ヴィヴァルディ等古典の曲からモーツァルト、ロッシニ、ドニゼッティ、私の声にあった曲を勉強させて下さいました。

大学三年生の春休み、中西先生より「大学院を受けてみたら？」とお話がありました。卒業したら沖縄に戻ろうかどうしようか迷っておりましたが、受けるだけ受けてみなさいと背中を押され受験することにしました。

受験する外国語をイタリア語で選択したのでイタリア語のレッスンに通い、ソルフェージュの先生のところでは和声や習い、西洋音楽史は大学院を受験する先輩と一緒に勉強したり。平日の夜は楽器店の音楽教室で受付のバイト。毎日何かしらレッスンを受けて走り回っておりました。

1995 年武蔵野音楽大学大学院に入学。大学院の同級生は 16 人。社会人を経験されてまた学びたいと大学院を受けた方や主婦など年齢は様々で、人生経験豊かな同級生たちとの二年間は有意義な時間でした。

武蔵野音楽大学の大学院はソロ科やオペラ科と分かれています。重唱研究コースか、またはオペラコースを選択できます。オペラコースはオーディションで選抜していましたので、学部の学生も受けておりました。

大学院一年生の時、中西先生からオブラスツォワ先生のレッスンを受けてみたらどう？とお話がありました。「はい！是非受けたいです」と即答しました。

オブラスツォワ先生は特別客員教授として毎

年数か月、学生たちや先生方にレッスンをする一方、学内のホールでリサイタルも開いておりました。

世界的有名なオペラ歌手のオブラスツォワ先生のレッスンを受けることが出来るなんて夢のようでした。一回目のレッスンにちょうど練習していたヴェルディ作曲『運命の力』「神様、私を死なせてください」を持って行きました。

「どうぞ歌ってみてください」と言われ歌いだした私を、オブラスツォワ先生はじっと見つめて聞いておりました。歌い終わって先生は険しい顔で、「Atsuko、あなたはどのようにしてこの曲を持ってきたのですか？」と言われました。「中音域を充実した声にしたいと思って、この曲勉強しています。」と言うと「あなたはレパートリーを知っているの？」「はい．．．」「レパートリーはとても大切よ。Atsuko も長く歌いたいでしょう？私は自分のレパートリーを大切に歌ってきたのよ。あなたも大切にしてください」と言われその日のレッスンは終わりました。

レパートリーがこんなにも大切なことだったとはその時まで考えていませんでした。その日のレッスンは 15 分で終わり、音楽の厳しさを思い知りました。

次のレッスンにドニゼッティ作曲『ランメルモールのルチア』「あたりは沈黙に閉ざされ」を持って行きました。歌い終わった私にオブラスツォワ先生は「Atsuko、Good！そう。これよ。あなたのレパートリー！」と仰って下さいました。ほほ骨のところを触って「ここが響く場所よ。ここを意識して歌いなさい」「声に頼るのではなく響かせて。息を流して！」「母音で響くポジションを変えないこと」そして何度も「響かせて！声に頼らないで！」と仰って下さいました。

大学院の短い期間でオブラスツォワ先生から何を習得したのかといえ少ないかもしれませんが。声に合っていない曲を持ってきた生徒に何度も歌わせて声を傷めさせないために、「レッスンはみません」と厳しく見えるようで愛のある言葉を今でも忘れることが出来ません。

年齢とともに声は変わっていきます。また声とともにレパートリーも変わっていきます。「声の身の丈に合った曲を歌いなさい」とオブラスツォワ先生の声が聞こえてきそうです。

2015年に亡くなられたオブラスツォワ先生のご冥福をお祈り申し上げます。

二年間の大学院生活を無事に修了した私は、東京二期会の研究生へと進みます。次号は二期会の研究生から今日までを綴りたいと思います。

(本会 理事)



オブラスツォワ先生と筆者

■ 音楽との出会い I ～ 恩師との思い出 ～

仲村渠 悠子 ピアニスト

ピアノに興味をもったのは、記憶のほとんどない4歳くらいの頃です。両親は音楽家ではありませんが、音楽に進みたい私の夢を全力でサポートしてくれました。音楽教室に通う前にピアノで遊ぶということを覚えました。この時期のピアノとの密な関わりが、様々な場面を乗り越える源になっていると思います。

両親は音楽家でないと書きましたが、そのおかげで私はある意味のびのびとピアノを弾くことができました。楽譜がまだ読めない時期に見よう見まねで弾くピアノは、間違えというもの

がなく、好きな音を自由に紡ぐ即興演奏でした。この遊びは、幼少期話すことが苦手だった私の感情のコントロール、自分自身を取り戻すためのツールとなり、今でも私を支えています。

小学校に上がる前に私は作曲家の上地昇先生が院長を務める「首里音楽院（後に沖縄芸術学院）」に通いはじめ、ここでものびのびと音楽を楽しみました。宮古島のキャンプ、キジムナーのミュージカル、小学校3年の時はアメリカ・カナダキャンプに参加し、現地の大学の先生からピアノ・ソルフェージュのレッスンを受けることができました。

6年程通ったこの音楽院で、私は運命的な出会いをします。2か月に一度、鎌倉から指導にいらしていた斎藤悠子先生。名前はヒロコと読みますが（私の母もヒロコ）、漢字は私と同じ「悠子」。先生が来沖する度に、新しいことを学ぶことができました。幼児教育が専門で、ウィーンで、歌曲伴奏の大家ヘルムート・ドイチュにも師事していた先生は、歌うこと、言葉と音楽の結びつきに興味を持たせるよう、色々な話をして下さいました。

中学に上がると、斎藤先生の勧めで、月に一度鎌倉の日比谷友妃子先生のレッスンを受けることになりました。

飛行機で通いましたが、中学2年の夏、日比谷先生のご好意で先生のお宅に下宿させて頂けることになり、鎌倉の御成中学校に転校しました。中学で親元を離れることに、ホームシックになりはしないかと心配する方もいましたが、私自身は嬉しくて嬉しくて、夢に向けて前進できることに舞い上がっておりました。

鎌倉での生活は本当に楽しいもので、学校から帰るとピアノの練習のため、色々な方のお宅を訪ね、夕方くらいまで練習しました。そこで出して頂くお菓子が楽しみで、やる気のない時は、お菓子だけ食べて自由弾きをして帰宅したりしていました。そんな時は決まって報告が行っているのです。日比谷先生もあきれていたことでしょう。四姉妹で育った我が家で、お菓子を思う存分食べられることなんてなかったので、

甘いものを独り占めできる生活は夢のようでした。ピアノを貸していただくお宅には、『バカの壁』で有名な養老孟司先生のご実家もあり、そこでもお菓子をたらふく頂いていたので、なんておかしな子だと思われていたに違いありません。

ここで、私の音楽体験で非常に影響を与えた母の話をします。母は、歌が上手で家の中でいつも歌っていました。祖母は、平和通りの商店街に店を出し朝から晩まで働いていましたので、寂しい母はテレビで流れる歌謡曲を真似て、一日中歌っていたそうです。美空ひばりや江利チエミ、ピンクレディー、松田聖子、なんでも歌うことができました。我が家ではクラシックではなく母の歌う歌謡曲が毎日を彩っていました。

先ほど四姉妹と書きましたが、実は私は五姉妹で一番上の姉は 8 か月の時に亡くなっています。ある時母が、こんな話をしてくれました。

「掃除機をかけてたらね、テレビでアフリカの番組がやってたの。子供を亡くした母親が、土に帰る赤ん坊の亡骸に歌を歌いながら母乳をあげていた。ショックだったよ。」彼らの持つ生命の力強さに圧倒されてしまったのだと。歌には、浄化の作用もあるということか、と私はその時思いました。気分の良い時の鼻歌から、苦しみから立ち上がろうとするいじらしい歌声まで、子供心に母の心理状況を感じとることができましたし、様々な感情を含ませることができる声、まさに声色というものに敏感に反応する子供だったように思います。私は母のような美声を持ち合わせていませんが、ピアノという楽器でその代わりができたかなと思います。

さて、中学 3 年になると受験準備のため、東京芸術大学名誉教授の高良芳枝先生の門を叩きました。厳しくて有名な先生で、本当に沢山のことを学ばせていただきました。高良先生には、留学する直前までレッスンを受けていたので、10 年間お世話になったことになりました。晴れて桐朋学園大学女子高等学校に合格し、楽しかつ

た鎌倉の生活から、桐朋学園の女子寮に移り、ここで七年間過ごしました。

女子寮での生活は勿論、毎日お友達と一緒に、お祭りのようににぎやかで楽しかったのですが、大きなスランプに陥りました。楽しかったピアノが、苦しいものになったのです。高校に入学して、はじめてのレッスンで「基礎をやり直しましょう。」と高良先生に言われました。「基礎」、と言われてもなんのことだかわかりません。ピアノ奏法の基礎といっても、色々な流派がありますし、最終的には自分の指、体を最善のやり方で使いこなす術を自分自身で探していくものだと思っていたので、先生のいう基礎というものに半ば反発を感じていました。

レッスンは、まず一音を注意深く打鍵することからはじまりました。指の先に腕の重さをのせ、手首や腕は完全に脱力するというもの。完全に脱力といっても、脱力したまま上から落下させると、雑音が発声してしまうので、弾く直前に指の先を締め支える。そして、打鍵したその指に集まった重さを隣の指に移動させ、音と音をつなげる。これがレガート奏法。頭で考えずにそれができるようになるまで、一音を何度も何度も弾くのです。こんな調子ですから 1 時間のレッスンでも数小節しか進むことができず周りの友達が色々なコンクールに挑戦するのを、横目でみては落ち込んでいました。

さらに、指の使い方をもっとしっかり学んだ方がいいということで、ミキモトパールの社長夫人でいらした御木本澄子先生を紹介して頂き、フィンガートレーニングに通うことになりました。フィンガートレーニングは主に、ピアノに向かっていないとき（電車に乗っているとき、授業中、人と話しているときなど。）日常の中で、指の必要な部分だけの筋肉を意識的に動かし、トレーニングするものです。ピアノを弾かなくても、指が詭らないようにすることができる上、意識したことのない指の感覚を発見できたりしました。ただ、私は真面目な生徒ではなく、2 年間通いましたが、それを習得できたとはいえないかもしれません。

高校の3年間は、ピアノが思うように弾けず苦しいものでしたが、唯一、先生に内緒で楽しんでいたのが、室内楽。高良先生からは、伴奏や室内楽を控えるようにと言われていましたが、こっそり、いや、ごっそり伴奏を引き受け、そのせいで自分の練習ができなかった面もあるくらいでした。

高校3年の学内の合唱コンクールでは作曲を試み(作曲部門で)一位を頂くことができました。課題の歌詞に旋律を付け、はじめて3声の合唱曲を書きました。クラスの担任であった、作曲家の安良岡章夫先生に指導していただき、言葉のもつイントネーションと旋律の抑揚がうまく合わさるように、と何度も何度も書き直させられましたが、音楽をすることに飢えていた私は、それがとても楽しく大きな自信となりました。

この時の経験は、声楽曲における旋律が言葉と深い関りをもっているということ、声楽曲にかかわらず、作曲家の表現する旋律というものが言語と関わり合っているということを考えるきっかけになりました。頭の中に流れる歌が、クラスの友人たちによって力強く歌われ、人の声のパワーというものを肌で感じる事ができる貴重な体験でした。一人でピアノを弾いているだけでは体験できない、仲間による音楽。ピアノ奏法の基礎につまづいている間に、ピアノ曲以外の楽曲に触れ、様々な楽器の友人たちと演奏できたことは、不幸中の幸いで今の音楽家活動につながっています。

さて、ピアノのレッスンは相変わらずで、思うように上達できず苛立つ私は、ついに高3年の秋、楽譜を持たずにレッスンに行きました。「先生、私は今日楽譜を持ってきませんでした。私はもう沖縄に帰ります。」きよとんとした、先生のお顔。「あら、何かつらいことでも？あなたは、中学から親元を離れているから、いろいろおありでしょう。私のことを近所のおばさんとでも思って、何でもお話になって。」高良先生のことを近所のおばさんだと思ふことなどできませんから、この優しすぎる先生の言葉に私は勢いをなくしてしまいました。今日こそは、

「基礎練習というものに時間を費やし、ピアノを弾くことが楽しくなくなった。」と、先生に訴えようと勢いよく寮を飛び出したのに、玄関口でこんな優しい言葉をかけられるなんて、。

「まあまあ、あなたくらいの年頃は色々あるものです。ちょっとお待ちになって、頂きもののケーキがあるの。」とレッスン室に通されてしまい、数分後にはあたたかいミルクティーとケーキが運ばれてきました。先生に伝えたいことが沢山、私はコンクールに出たいし、皆と同じ地点で勝負したいのに、スタートラインにも立たせてもらえないこの状況は耐えられない、と。自分がピアノを弾けなくなった理由を基礎練習のせいにしたかったのです。

しかし、運ばれてきたミルクティーとオレンジピール入りのパウンドケーキが、この勢いを完全に打ち消してしまいました。甘いお菓子はことあるごとに私の意思を和らげてしまうのです。先生は、昔の生徒が留学先から送ってきたという手紙や、絵葉書などをあちこちから取り出してきて、黙々と食べている私に読んで聞かせて下さるのです。そして、最後に「色々なルールがあるかもしれないけれど、一つのルールを走るということをやってみるのもいいと思うの。その後に自分のいきたい道を歩めばいい。ピカソだって、写実を沢山したそうよ。はじめからあの独創性あふれる絵を描いたわけではないそうよ。」と。帰りの玄関で、私は恥ずかしくなり「もう少し、頑張りますので宜しくお願い致します。」というのが精一杯でした。この日のことを沖縄の父に話すと「先生ほどの方が、悠子の目の高さまで降りてきて話してくれたことを、忘れないようにしなさい。」と言われました。

その後、私は心を入れ替え、週末を鎌倉の斎藤先生のご実家で、集中してピアノを練習することにしました。寮生活は楽しすぎて、学校から帰ると食堂でおしゃべり、お風呂場でおしゃべり、誘惑がいっぱいで、合間に器用に練習することができなかったからです。金曜の夜、調布から鎌倉まで片道約2時間、土曜、日曜と猛

練習して月曜の早朝に東京にもどるようになり、この習慣は留学直前まで続きました。

週末の集中的な練習は、有意義なものでした。しかし、一日 10 時間くらい練習してしまい、後に椎間板ヘルニアで入院するまでになってしまいます。過ぎたるは及ばざるがごとしです。

大学 1 年の時に父が急に亡くなり、より一層頑張らなくては行けないと、思いを強くしたことも要因のひとつかもしれません。私がピアノを弾くのをとても喜んでいた父ですが、恥ずかしがり屋で演奏を聴きに来てくれたことはありません。ビール片手に庭を眺めながら、自宅で練習を聴くくらいでした。現代文学が専門だった父は、私が思い悩んでいるとき「夏目漱石」や「宮沢賢治」の一節を手紙にしたため送ってくれたりもしました。

こうして振り返ると、今までたくさんの奇跡的な出会いがあり、無駄なことなどひとつもなかったと実感できます。声を出すことが苦手な私が、この日本歌唱芸術協会と関わらせて頂き、勉強できる機会が得られることも有難いご縁です。沖縄を拠点に動き出すこの協会の活動が、音楽を愛する人々のよりどころとなり、世界がつながればどんなに美しいかと思えます。

自己紹介を兼ねて、音楽との出会い、お世話になった恩師との思い出を書かせていただきました。最後までお読み頂き、ありがとうございます。次回は、ドイツでの生活、そこでの音楽体験等をご紹介できたらと思っております。

(本会 理事)

高良先生ご自宅のレッスン室にて

左(筆者),右(高良芳枝先生)



■ 声楽家への軌跡-『師』との創造体験

～ 師としての感受性 ～

豊田 喜代美 声楽家, 博士 (知識科学)

大学卒業年に、東京文化会館大ホールで読売新聞主催『新人演奏会』で歌った時、深く豊かな包容力のあるホールの音響に、何故か大きな安心感を覚え、とても感動しました。その後、オペラ公演やオーケストラ定期演奏会などで、東京文化会館で大変に多くの演奏をさせていただくことになりましたが、このホールの深く豊かな音響を感じて歌を委ねることができた時に、作品に込められた至高の世界に導かれました。

その後、サントリーホールという、今や世界に名だたるホールが完成し、創立前の音響を確認するためのオーケストラ演奏（マーラー作曲交響曲）で歌いました。その時点で、既にサントリーホールの今後の活躍を予感させる素晴らしい音響が内在していると感じ、このホールで歌うことが楽しみになり、その期待は歌う度にますます満たされていきました。

演奏家にとっての芸術創造体験への導きは、感受するホールの響きとの協調作業もあることを忘れてはならないと思っております。

母の育児日記によると「今日は幼稚園で保護者会があり、喜代美ちゃんの感受性は非常に強くて繊細なので育てるのが難しいかもしれない、と先生から言われた。」とあります。育てるのが難しい理由は、感受性が強いと嬉しさだけでなく辛さや苦しみも強く感じ取るからとのことだったようです。作曲家で教育家のオルフは「音楽は精神の腐葉土」と記述し、母と父が私の感受性を音楽の土壌にしっかり植えてくれたことで育つことができた、と思っております。

感受性があればこそ、譜面に込められた暗黙的な意味を感じ取ることができるので、ある意味で、感受性は師匠であると考えています。

オペラやコンサート、その一つひとつを演出家や指揮者の許でベストを求めていく作業、それは自分との闘いになり、武器というか抛り所

になるのは幼少期からの勉強（全譜面をピアノで弾けるだけ弾くこと）に立ち返って譜面を読んで感じる事でした。オーケストラ定期演奏会は、切れば血が出るような壮絶な演奏の場であり、指揮者の許、オーケストラ奏者と共にならなるとなるとの演奏体験は、正に感受と感受との紡ぎ合いによって、確実に私を芸術創造体験に導いたと考えています。演奏の試練は、音楽に込められた尊い価値（真善美）が私の感受性を強くしなやかに鍛える場となっていたことを、振り返ると良く理解できます。芸術創造体験については、昨年3月、東京大学 芸術創造連携研究機構発足シンポジウム『学問と芸術の協働』で述べております。<https://youtu.be/BCC-Y2Wr-dg>

演奏活動に社会的な評価もいただき、身に余る音楽家の道を歩ませていただきました。それらを思う時、そこには必ず亡き母の存在が在ります。先の会報にも記させていただきましたが、母は私の日頃の行動にも演奏に関しても声をかけることは決してありませんでした。毎回のオペラやオーケストラ定期演奏会において自分との闘いにあけくれる私を徹底的に信じて、見守る母の祈りは、母が帰天した今も深く強く感ずることができ、支えられています。

そのまま音楽家としての生涯になる可能性は大きかったと思いますが、一人の素晴らしい女性との出会いによって、国立法人北陸先端科学技術大学院大学（JAIST）博士前期・後期課程に修学し、演奏活動と科学研修を並行して行う中、入学から9年目に知識科学の博士号を取得し演奏家として科学の世界を見つめることになりました。<https://www.jaist.ac.jp/about/>

情報科学研究科および材料科学研究科で構成されていた北陸先端科学技術大学院大学に知識科学研究科が設置され、その一期生が入学したのは1998年、私がホスピスの患者さんと出会った年でした。私は二期生になります。

周りは大学を卒業したばかりの若者で、会社から送られた人材も20才代という中で勉強し続けてこられたのは、音楽家としての私を真正面から受け止めて下さり、芸術に対して何らか

の可能性を確信している、当時の研究科長である野中郁二郎教授をはじめ、吉田武稔教授、小長谷明彦教授、中森義輝教授、國藤進教授、藤波努教授他の先生方のご指導に恵まれたからだと言えます。

上記大学院大学のホームページに記載されているように、授業内容は、数三、物理、統計学、論理学、認知科学、他、それまでの私にとって触れることの無かった科目であり、当時の私はコンピュータを触ったことがありませんでした。毎授業では必ずレポート提出が課せられ、徹夜を何度も経験しました。午後のオフィスアワーを毎日利用して個人指導を受けないと良く理解することができませんでした。しかしグランドピアノのあるロールプレイルームは見晴らしの良い、海が見渡せる8階にあり、自然豊かな環境は快適で、いつでも音楽の練習および音楽鑑賞実験ができました。そのロールプレイルームでミニコンサートも頻繁に行いました。

最も印象に残っているのは、修士論文の音楽鑑賞実験にJ.S. バッハ作曲《マタイ受難曲》の受難コラールを用いた時のことです。「この曲を知らないで一生を終えることにならなくて良かった」という、感想文の中の言葉を読んだ時に、私はまたも音楽の力を具体的に感じました。

国際学会やシンポジウムへの論文発表・質疑応答も英語であり、博士後期課程の授業時の言語は英語です。国際シンポジウムでヨーロッパの参加者から「あなたは日本人なのに、何故西洋クラシック音楽の研究なのか？」との質問を受け、「私が生まれた時の音楽は、母や家族と歌う愛唱歌も、学校教育、流行歌も五線譜によるものであり、それらの音楽が私自身の音楽として在る。」と答えました。英語が堪能ならもっと有意義な議論ができたと思い、これまでの不勉強を悔やみました。

博士論文は『クラシック音楽歌唱における知識創造モデル—スキルサイエンスからの接近』で、内容は、真・善・美に向かって上昇していく歌唱演奏トレーニング方法のモデル化、音楽鑑賞実験、そのモデルを使用した演奏の実証研

究、発声における『あくび』の効果の実験検証です。

国内外でも使われ自分も発声時に使っている『あくび』の作用の真実が知りたかったので、『あくび』の歌唱発声への効果について実験検証しました。耳鼻咽喉科医師として世界的名声を築いていた米山文明先生に「検証方法を教えてください。」とお願いしたところ東京大学造船科の機器を用いることを提示くださいました。

それは、完成した船の見えない部分の亀裂の有無を調べる機器でした。実験は、歌唱時の喉の作り方で『あくび』の工夫の有無の2種類を設定し、それぞれの骨伝導状態の違いを計測し数値で現すものです。実験結果は、ソプラノの高音と中音では『あくび』の工夫をした喉の作り方が大きく明らかに豊かな響きの値を示しているのが目で確認でき、低音では差がありませんでした。興味深かったのは、実験に立ち合った教授たちは「あくびの工夫の有無による音響を生で聴いた時は、それほど違いは感じなかったが、音響の計測値を見てその違いに驚いた。」と発言したことです。

この発言を聞いて直ぐに思ったのは、『そば鳴りの歌声』でした。これは、歌声を近くで聴くと大音量であっても、ホールで聴くと聴こえない響きの状態の歌唱発声のことです。歌声は響きが問題であることは知られています。この『あくび』の工夫の有無による声の響きの状態を見る骨伝導計測実験は、自らの歌声の響きの状態が計測によって数値とグラフで明確に示されます。私は、この実験検証によって、自らの発声方法の肯定を得ました。また発声指導にあたり、確信を持って臨むことができました。

47才で博士前期課程入学2年後に修士取得し、博士後期課程には6年間在学し博士号取得は7年目でした。博士論文の学外審査員2名はスキルサイエンスを社会的に初めて提示なさった慶應義塾大学の古川康一教授、そしてF.ディスカウはじめ世界的声楽家の日本における主治医であり世界3大名医と評価されている耳鼻咽喉科医師の米山文明先生でした。

博士論文『クラシック音楽歌唱における知識創造モデル—スキルサイエンスからの接近』内容の、“真・善・美に向かってスキルが上昇していく歌唱演奏トレーニング方法のモデル化、そのモデルを使用した演奏の実証研究”、声楽発声における『あくび』の効果の実験検証、のプレゼンでの手応えに、合格の確信はありませんでしたが、自分の発声の真実を確認できたことだけでも満足でした。しかし合格をいただいた時には、思わず涙が出たのを覚えています。

北陸先端科学技術大学院大学在学中、芸術に可能性を見ている研究者である先生方の熱心なご指導によって、科学の世界の一端を体験することができ、与えられる一つひとつの研究の結果を自分の演奏に活かしながら、演奏と研究に並行して努めることができ、それは今も継続しております。深く、深く感謝しております

https://researchmap.jp/gratiamusic1_11_4

このような世界に私を導いた、一人の素晴らしい女性とは、福岡のホスピス患者さんです。

1998年九州交響楽団定期演奏会マーラー作曲交響曲第4番のソプラノソロを演奏させていただいた時、ホスピスにお願いして、ご奉仕のコンサートをさせていただき、出会いました。私が留学以来通い続けているドイツでは、プロの演奏家をご奉仕の演奏をするのはごく当たり前で、ライン・ドイツ・オペラ・デュッセルドルフ歌劇場専属歌手の矢野恵子さん（メゾソプラノ）は帰国の度に、お父様が入院なさっている、上記、福岡のホスピスで歌の演奏をなさっておられました。それを伺っていたので、私もご奉仕の演奏をお願いしました。

ピアノは熊本在住で音楽短大教授の私の桐朋学園女子高（普通科）時代からの親友が引き受けてくれました。陽の光が燦々と入る木造の気持ちの良いホスピス2階の踊り場に、ベッドごとや車いすで患者さんがお集まりになり、集まらない方は各病室にビデオで私の映像と歌が届けられました。私は白地に草花が散りばめられたドレス・ワンピースを着て、日本の唱歌、ア

ベ・マリアなどを歌いました。皆さまとても喜んでくださり、歌った後も病室に戻らず、私はお一人おひとりとお話をすることができました。

その中に、「私はこの歌のこの歌詞で生きています。死ぬのが怖くないんです」と車いすながら背筋がピンと伸び、その楽譜の歌詞を指さして、しっかりとした眼差しで私を見つめて仰る女性がいらっしゃいました。その時、私は、魂がドクッと動いたように感じて、この女性ご本人もご家族も何とお幸せなことか・・・と思いました。このように感じさせた歌の力を目の当たりにして、「歌の作用を知りたい」と強く思いました。

これまでも北オランダ交響楽団3回の定期演奏会でモーツァルトのモテットを演奏した際、演奏会3回全てスタンディングオーベーションを頂くという、国籍などの差異を問題にしない歌唱芸術体験に恵まれてきましたが、このホスピス患者さんの「この歌のこの歌詞で生きている」という言葉と事実は、私の心に深く突き刺さり、この時に感じた力のようなものが新しい世界の扉を開けてくれました。

この体験が私を演奏活動と並行して科学に目を向けるようになったきっかけです。ご奉仕の演奏会の翌年1999年北陸先端科学技術大学院大学に入学しました。47才の時です。2年間で博士前期課程を修了して修士号を取得した後、そのまま博士後期課程に進学し2017年に修了し、2008年に博士号を取得しました。

この文章を読んでくださっている方の中で、演奏への糧という観点で科学の大学院に興味をもたれて、人生の中で数年間、身を置いてみたいと思う方は、ご相談いただけましたら、具体的にご案内いたします。

演奏体験を研究テーマにしたことで、声楽の楽器は身体であることが科学的視点で理解可能であること、声楽トレーニングは身体全体の機能を活性化し感受性を鍛え、個としての自覚、気づきを多くする可能性があり、創造性の開発に繋がることを、私なりに確信しました。

現在は芸術創造体験による人の感受性育成支援に関心を持っております。2018年9月より、東京大学の1,2年生を対象にした授業『楽器としての身体：声楽の実践と科学』を身体運動科学者の工藤和俊先生と担当しており、毎年度の授業で、全履修生に、あるがままの自分に対しての『自信』という効果が確認できることを、工藤先生と共に大変に喜んでおります。

日本は先進国の中でも自殺者が非常に多いことは知られており、私もウィーンのボイスコーチに「新聞で見た。日本の自殺者は年間の交通事故死者より多いのは何故だ？単一民族で経済大国で、何が問題なのだ？」と聞かれました。この質問は通奏低音のように私の中で鳴っております。

一人ひとり、かけがいのない、その人だけの感性があり、能力があり、そのことに自らが気づく感受性を鍛えることで、迷い悩みながらも何とか自分を頼りに生き抜いていくことができるのではないかと考えており、それを願いつつ、声楽と科学と共に活動してまいります。

(本会 代表理事)

体表振動測定実験 2007年

全9か所に順次装着して計測

体表振動測定実験センサー装着例：被験者は豊田

顔面5か所、左右顎関節部、第7頸椎、胸骨部



♪～愛好家会員からのメッセージ～♪

《 歌・ことばの集い 》

糸数 剛

声楽一步の精進

公立中学校校長定年と同時に歌手活動をすることを宣言した。

あれから十二年、声楽愛好家として充実した音楽生活を送っている。

声楽愛好家にとって良い発声をめざすことは人生の大きな楽しみ。

どうすれば良い声が出るかと絶えず精進している。

発声の上達は右肩上がりに徐々に伸びるのではなく、ある時ふっと新しい発見があり、その時に一步上達する。

その一步を発見するために日々発声練習をしたり、コンサートに出かけてプロ歌手の発声から学んだりする。

日本歌唱芸術協会（本部：沖縄）旧沖縄声楽発声研究会の各事業でも多くの一步を得た。

特に印象に残っているのはイタリアのテノール歌手ジョルダーノ氏を迎えての研修会で学んだ「アッポッジョ」。

良い声が出た時は快感。

加えて、無理せず楽に声が出るようになるとますます快感。

喉の負担も軽くなる。

良い発声が定着すると歳を重ねても衰えることなく、百歳まで歌えると信じている。

（本会 相談役）

《 歌・ことばの集い 》

新垣 しげ子

乳幼児教育における音楽

私は保育士。

毎日たくさんの子どもたちの笑顔に囲まれ、明るく楽しく幸せです。

その中で音楽の果たす力が大きいと思います。例えば乳児は優しく心を込めて歌うと笑顔になり、大泣きしている子どもだんだん落ち着き笑顔になります。そして大きく成長するにつれて言葉を発します。最初は片言、それからだんだん上手に大きな声で元気よく明るく歌います。その子供たちは、情緒が安定し、明るく楽しい笑顔が生まれ、次の活動を落ち着いて行います。

幼稚園教育要項に「音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりする楽しさを味わう。」とあります。幼児教育の音楽において、「何をどのように学んでいくか」、「何ができるか」を考えています。私は乳幼児の音楽教育の実践および童謡などの作詞・作曲・演奏・歌うことを行ってきました。CDを制作し、コンサートを開催しました。また紙芝居や絵本、リトミック、おゆうぎ、手遊びや音楽発表会、マーチング器楽演奏などを保育の現場で実践してきました。その結果、音楽の大きな役割や成果の発見がありました。それを評価・反省し、保育の音楽教育に発展させたいと思っています。

私は保育士として、日々の保育の1人ひとりについて保育日誌を記録してきました。年間指導計画や月案、週案などの計画を立てます。その中に音楽を導入しています。自ら考えて想像する力の育成に音楽の重要性、役割を強く思います。

音楽は紙芝居、おゆうぎ、リトミック、器楽演奏などに幅広く応用や活用されています。その保育実践経験などの評価・反省を行ない、課題を見出し、乳幼児教育における音楽のあり方や課題、新しい音楽教育のあり方や方法などを模索・研究して行きたいと思っています。

《 歌・ことばの集い 》

瑞慶山 三雄

「音楽はなぜ人を感動させるの？」

についての一考察

本稿を書くにあたり、まず最初にお断りしなくてはなりません。私は音楽を専門的に教わった事はなく、従って音楽の素養はありません。

クラシックから民謡、琉球古典音楽まで何でも好きな、雑食系(?)な一音楽愛好家です。素人の戯言をご容赦ください。

本題です。

音楽は人に感動を与えます。これは紛れもない事実です。音楽のどんな要素が聴く人を感動させるのでしょうか。このことについて私の経験を紹介したいと思います。

私の所属するコーラスサークルに I さんという方がおります。80歳を超えています。その I さんが定例のコンサートで「マイ・ウェイ」をソロで歌いました。音程は危なっかしく、リズムもピアノ伴奏者が何とか合わせ、普通なら聴くに堪えないような状況です。なのに私は I さんの歌に感動しました。本人の真剣な表情に I さんのこれまでの人生がこの「マイ・ウェイ」にいっぱい詰まっているように感じました。

琉球古典音楽には「思入り(れ)」というのがあります。

美声に完璧な音程とリズムを具えた歌であっても、心を素通りすることがあります。「思入り(れ)」の押し売りと感じる歌もあります。私は、この「思入り(れ)」の正体がいまだに解りません。ただ、これは洋の東西を問わず音楽の奥深さにつながる要素の一つではないかと感じています。

翻って私も「聴く人の心に届く」まではいかなくてもせめて「掠る」ようにはなりたくないと密かに思っています。